



▲美しく耀く銃身の内部

形をピッタリと銃床に納めなければならぬ。銃床の溝にチヨークを塗って銃身をはめると、強く当たる部分のチヨークがはげる。はげた部分を少し削って、同じことを何度も繰り返していく。100分の1mmの狂いもなく、ピタリと納まる必要がある。根気のいる作業だ。

次は銃身と銃床を固定させる目釘穴や、銃身の手元のネジである尾栓を納める穴、カラクリを納める穴などを彫る。そして外側をカンナ、ヤスリ、サンドペーパーを使って滑らかに仕上げた色合いに仕上げる。「傷んだ銃床の下部にある細い溝の隙間から中を覗いたら、わずかに3本のノコギリ刃の跡が見えた。ハハーン、これやなと思った」と廣瀬さん。カルカ穴を通すための前作業を、そこから見つけ出した。

外から見えない部分にも職人技
ものづくりには、つくる順序が大切である。まずは、ものをつくるための道具をつくる。そして、いくつかの前作業を順番にこなしていく。最後に仕上げの作業をおこなう。これら一連の知恵と技は、優れた職人であるための基本であり、優れた職人の証である。「畳をつくっていても、飯を食べていても、鉄砲をどうつくるかを考えてた。するとある時パツとひらめくわけや」と廣瀬さん。そのようにして難問をいくつもクリアして、銃床を復元した。昭和59年のことだ。その作業をまとめ、平成3年に「銃床製作の控」という本を著している。

三つ目の仕事は、カラクリと呼ばれる機関部をつくることだ。引き金や火ぶた、ハジキ金、火バサミといったカラクリの部品を真鍮で製作した。ただし、昭和56年に旧家の物置から見つかった部品などによって、当時のカラクリは、鋳型で鋳造されていたことが判明した。

最後に、尾栓を外した銃身の中を覗かせてもらって驚いた。丸い穴の中が鏡のように美しく輝いているのだ。銃身の筒の中は、モミシノと呼ばれる道具できれいに研削する。外から見えない部分に職人技が光っている。これが国友鉄砲の美しさだ。

天保6年(1835)に国友藤兵衛が書き残した『能當流一流目録』は、「技」よりも「体」と「心」を重視し、「術」よりも「道」を説いた鍛冶心得指南書であり、砲術の作法書でもある。



▲カルカをつくる廣瀬さん

ここで銃床の製作を仮想体験してみよう。厚さ45mmの細長い椀材に墨付けをして、銃床に近い大きさに粗切りしていく。全長は1262mm、高さは42mmで、お尻の手に持つところがカーブを描いて膨らんでいる。銃床の上部に、銃身を納める溝を粗彫りする。下部には、カルカを納める穴を開ける。カルカとは、銃身に火薬と玉を詰め込む木製の細い丸棒のこと。小筒の場合、わずか8mmという細さで、長さは900mm。これがすっぽりと納まる、真っ直ぐな穴を開けなければならない。カルカ穴を開ける作業が銃床製作のハイラ

ノコギリ刃の跡見つけ難関クリア
銃床の下に、ノコギリ刃を通すために付けた、わずか1mmほどの背割り溝の隙間を塞ぐために、上から熱湯を何回もかけて万力で両側から絞る。するとピタリと隙間が閉じる。銃身を納める溝を仕上げた作業もハイライトの一つだ。銃身は真っ直ぐではなく、先に向かってラッパ型に微妙に開いている。この



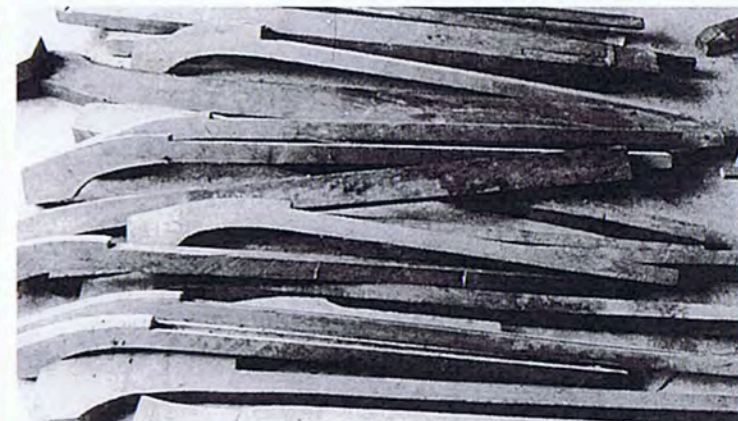
▲ピッタリと銃床に収まったカルカ

そこで職人の廣瀬さんは、やる気がむくむくと沸き出した。自らが銃床をつくって復元し、その過程を記録することで、国友鉄砲の優れた技を広く知ってもらうことができる。そして後世へ伝えることができる。銃身はつくることができず、銃床は法に触れない。ちょうど、自分が持っている鉄砲の銃床が壊れているので、これを復元しようとして試みたわけだ。

銃床製作の難関がカルカ穴開け
台師道具と銃床の用材が見つかったお宅から、用材を提供していただくことができた。道具類の一部をお借りすることもできた。当家の人が鉄砲研究会のメンバーだったこともあるが、何よりも廣瀬さんの熱意に打たれたといえよう。

ここで銃床の製作を仮想体験してみよう。厚さ45mmの細長い椀材に墨付けをして、銃床に近い大きさに粗切りしていく。全長は1262mm、高さは42mmで、お尻の手に持つところがカーブを描いて膨らんでいる。銃床の上部に、銃身を納める溝を粗彫りする。下部には、カルカを納める穴を開ける。カルカとは、銃身に火薬と玉を詰め込む木製の細い丸棒のこと。小筒の場合、わずか8mmという細さで、長さは900mm。これがすっぽりと納まる、真っ直ぐな穴を開けなければならない。カルカ穴を開ける作業が銃床製作のハイラ

イトだ。まずは銃床の下部にノコギリ刃のガイドとなる細い溝を900mm近い長さで彫り、そこに10mm程度の深さで真下と右斜め、左斜めの切れ目を付けていく。銃床の先からカルカ穴を開けるのを容易にするためだ。そして鉄工用のキリに、鋼鉄棒を溶接して130mmのオリジナルな工具をつくる。これを銃床の先端から回転させながら削り込み、穴を開けていく。長いカルカ棒を収納する穴だから、真っ直ぐに通っている必要がある。神経を集中させておこなう作業だ。



▲旧家の小屋から見つかった数十本の銃床用材

ドローン
撮影代行
販売
スクール開催

プロクルーロボティクス 検索
E-mail: info@e-ohmi.net
TEL 0749-62-2762

株式会社 **プロクルー**
滋賀県長浜市田村町1281-8
長浜バイオインキュベーションセンター4-5

2019年8月16日(金) 炎天下

堺と国友が 技術を合わせた 大筒に出会う

今回のあやしいメンバー
太田、国友、西、メイ



▲堺市民の足となって100年を数える阪堺電車

戦国時代、種子島に鉄砲が伝来した後、その生産に取り組んだのは国友だけではなかった。根来、日野、堺なども生産地だったが、なかでも徳川幕府との関係が密であった堺と国友は、大坂の陣後も幕府の御用達となる。幕府に一定数を納入する必要があり、組合組織も整えられている。



▲さかい利晶の杜ロビーのマップで位置確認



▲民家を資料館とした堺鉄砲館



▲江戸時代前期築の鉄砲鍛冶屋敷「井上関右衛門家住宅」。入口から奥まで土間が通り抜けている



▲銃を構える二宮さん。堺鉄砲隊の隊員でもある



▲一般公開に向けて整備中の鉄砲鍛冶屋敷(現在非公開)

阪堺電車でチンチンと

摂津、和泉、河内の三つの旧国の堺で発展したことから名付けられたという「堺」の地名。大阪湾に面する人口83万の政令指定都市だ。

堺といえば、茶人・千利休、歌人・与謝野晶子の出身地でもある。ということで、まずは天王寺から阪堺電車に乗って、この二人を顕彰する「さかい利晶の杜」へ。阪堺電車は、明治44年の開業来「チンチン電車」と親しまれ、市民の足として堺のまちなかを南北に走り抜けている。

2015年にオープンした「さかい利晶の杜」では、利休の待庵を復元した「さかい待庵」で戦国時代を体感。秀吉との因縁も気になるけれど、今回の目的は「鉄砲」だ。新幹線に乗り遅れた国友隊員と合流し、すぐ近くにある利休屋敷跡と晶子の生家跡を見学すると、チンチンと高須神社駅まで戻る。戦災に遭わなかった中浜筋の建物には昔の面影が残っている。そのひとつである堺鉄砲館が今回、最初の取材先だ。ここは民家を借りて20年ほど前にオープンした私設の資料館で、土・日・祝日に見学できる。取材当日は開館日ではなかったが、二宮要館長が快く取材に対応してくださった。

潜り戸を通って入ると、土間がずっと奥まで伸びている。まず左手が鞆部屋、右側が店の間として使われていた部屋で、2mほどもある大砲や銃身、銃床、その木型、大あいごなど、たくさんのもが並べられている。「今はまだ準備段階で、屋敷内にあるものをいったん出して調査している状態です」と岡本さん。吸い寄せられるようにそれらに近づいていく国友隊員。鉄砲について研究している者の特権だ。とはいえ撮影は一般公開時までできない。

土間の両脇には作業場や座敷、仏間などが並ぶ。鍛冶場は土間を抜けた奥にあったそうだが、今は駐車場になっている。廊下でつながった隣家は、堺最後の鉄砲鍛冶だった井上関右衛門寿次の屋敷だった。近年リフォームされた壁を剥がした箇所からは、過去の欠片が姿を表している。そこには茶室の形跡と見られるものもあることから、寿次は文人でもあったと推測されるそうだ。「間口4間もある大きな屋敷ですし、膨大な所蔵品の整理だけでも時間を要しますが、2023年度には一般公開できるように進めています」と岡本さん。国友には残り得なかつた日本でも唯一鍛冶屋敷の修復が待たれる。

「ここをオープンしたのは平成21年で展示してあります。この長いのは挟間筒、扉の狭間から狙える形になっています。実際に持ってみてください。どうです、重いでしょう。陣羽織を着て記念撮影もできますよ」

館内には、鉄砲を鍛造するための炉を再現したものや、鞆、陣笠、槍なども展示されている。壁にかかった元禄元年当時の詳細な町割り図や、「堺の津」の絵図について、館長が軽快なトークで解説。堺の鉄砲への興味を深める取材班だった。

江戸時代からの鉄砲鍛冶屋敷

続いて、すぐ近くにある「井上関右衛門家住宅」へ。この建物は江戸時代前期築の、堺市指定有形文化財に登録される鉄砲鍛冶屋敷。「元禄二年堺大絵図」にも載るわが国最古の町家建築のひとつで、居宅兼作業場兼店舗が残されている。

明治時代まで製造を続け、2018年までここで居住されていたとのこと。現在は主屋と座敷棟、鉄砲23丁などが所有者から市に寄贈され、市が改修に取り組んでいるところだ。現在は非公開だが、堺市文化財課の岡本茂さんが特別に取材に対応してくださった。

「鉄砲町」と七まち

外に出ると日射が強い。「堺のまちは傘要らず」といい、軒が深いのが特長だそう。雨除けだけでなく、日よけにも深い軒下はありがたかった。

その後、隣接する清学院を見学。かつての寺子屋で、日本人として初めてチベットに入国した僧・河口慧海(1866-1945)もここで読み書き算盤を習ったそう。

地図を見ると、そこから数百メートルのところ「鉄砲町」という町名がある。現在はイオンモールが占めているが、このあたりの七つの町にはかつて鍛冶職人が多く居住しており「七まち」と呼ばれた。堺の「五鍛冶」のうち棟並屋敷左衛門家、柴辻理右衛門家はこの辺りにあったという。彼ら鍛冶職人の技術は、その後、鉄砲から包丁や自転車へと受け継がれ、堺の伝統産業となっている。また、鉄砲鍛冶の繁栄を祈願して創建された高須神社もこの近くだ。

次いで取材班は、堺の観光ガイドブックにも大きく取り上げられている「山口家住宅」を目指す。「堺は建て倒れ」といわれたそうで、紀州街道を行くと立派な建築物が多くみられる。山口家は「江戸時代、庄屋を務め、奉行